玉の浦物語

鎌倉　勇弥

その昔、大宝山に立つ大岩の上には、夜になると光り輝き、まるで小さなお日様のように辺りを照らす、不思議な宝玉がありました。

絵・森田　菜摘

その光は、海に出て漁をする者にとっての道しるべでした。漁師たちは、あたりがどれほど真っ暗闇でも、どれだけ遠くからでも、その光を目印に尾道に帰って来ることができたのです。

ところがある日のこと。はるか遠く、海を越えて尾道にやってきた者たちがいました。彼らは大宝山にやって来るや、『この光る岩を売ってくれないか』と言いました。岩を守る者たちは、『あれほど大きな岩、どうせ持って帰れないだろう』と思い承諾したのですが、彼らは道具を使い、器用に岩から宝玉だけを取り外して持ち去ってしまったのです。

けれど彼らは、宝玉を自分たちの船に乗せようとした際、誤って海に落としてしまいます。

以後、大宝山の大岩は光を失い、宝玉が沈んでいるとされる尾道の海は『玉の浦』と呼ばれるようになりました。

北陸からやって来て大阪へと荷を運ぶ北前船が、尾道の街を寄港地としていた頃。海を臨んで並ぶ小さな家々の中に、その一家が住む家はありました。父親はおらず、住んでいるのは二人の兄弟と、母親の三人でした。

兄弟の名前は、兄の方を太助、弟は小太郎と言って、小太郎は七つ上の兄のことを『あんちゃん』と呼び慕っていました。

太助は腕の良い漁師でした。小太郎の方は、もっぱら家で母親の内職を手伝っておりました。本当は兄の手伝いがしたかったのですが、十になるまでは駄目だと言われていたのです。

太助はいつも朝から漁に出かけ、日の暮れる頃に帰ってきます。だから小太郎は、日暮れが近づくと、いつも外に出て太助が帰って来るのを待つのでした。

「なあ、あんちゃん。十になったら、一緒に海に連れて行ってくれるんじゃろう？」

夕食も終わり、寝床に入ろうかという時、小太郎は太助に尋ねました。

その問いはここのところ毎晩でしたが、太助は小太郎の頭に手を置いて、からりと笑って言いました。

「おう。十になったらの」

すると小さな弟は、嬉しそうににっこりしました。それもそのはず。今は年の暮れ。あと数日もすれば、小太郎は数えで十になるのですから。

次の日のことでした。小太郎は早起きをすると、家の前にある船着き場まで、漁に出掛ける太助の後をついて来ていました。兄は桟橋に結んであった綱をほどくと、魚籠や釣り糸などの道具を持って乗り込みます。

小太郎はその様子をじっと見ていました。

「船に乗るのは楽しみか？　小太郎」

「うん」

「はは。まあ待っとけ。もうすぐ十になったら魚の釣り方も教えちゃるけえの。お前なら立派な漁師になれる」

桟橋の支柱を蹴って船着き場から船を出し

ながら、太助は小太郎に向かって高々と腕を振り上げました。

小太郎も手を振り返しました。櫂を漕ぐ兄を乗せた船は、どんどん小さくなり、やがて見えなくなりました。

しかし小太郎は気付きませんでした。その時、空の彼方からひっそりと、灰色の雲が顔をのぞかせていたのです。

昼を過ぎた頃から、晴れていた空は打って変わって薄暗くなり、風が吹き、大粒の雨が海面を激しく叩きました。

小太郎は家の中で、外の様子に耳を澄ましていました。雨音は激しく、えらく強い風が家をガタゴトと揺らしました。

その日。太助はとうとう、帰っては来ませんでした。

太助の行方が分からなくなって五日が過ぎました。

「なんで、あんちゃんは帰って来んの？」

小太郎が尋ねると、母は、じっと息子の目を見て答えました。

「太助は海で迷子になっとるんじゃ。じゃけえ、まだ帰って来れんの」

「あんちゃんは、迷子？」

「そうじゃ」

母はうなずくと、そっと小太郎を抱き寄せました。その日の夜もとっぷり更けた頃。小太郎は一人、家の外に出ていました。太助が戻って来なかった日からよく眠れず、毎晩、夜中に起きては外に出ていたのです。

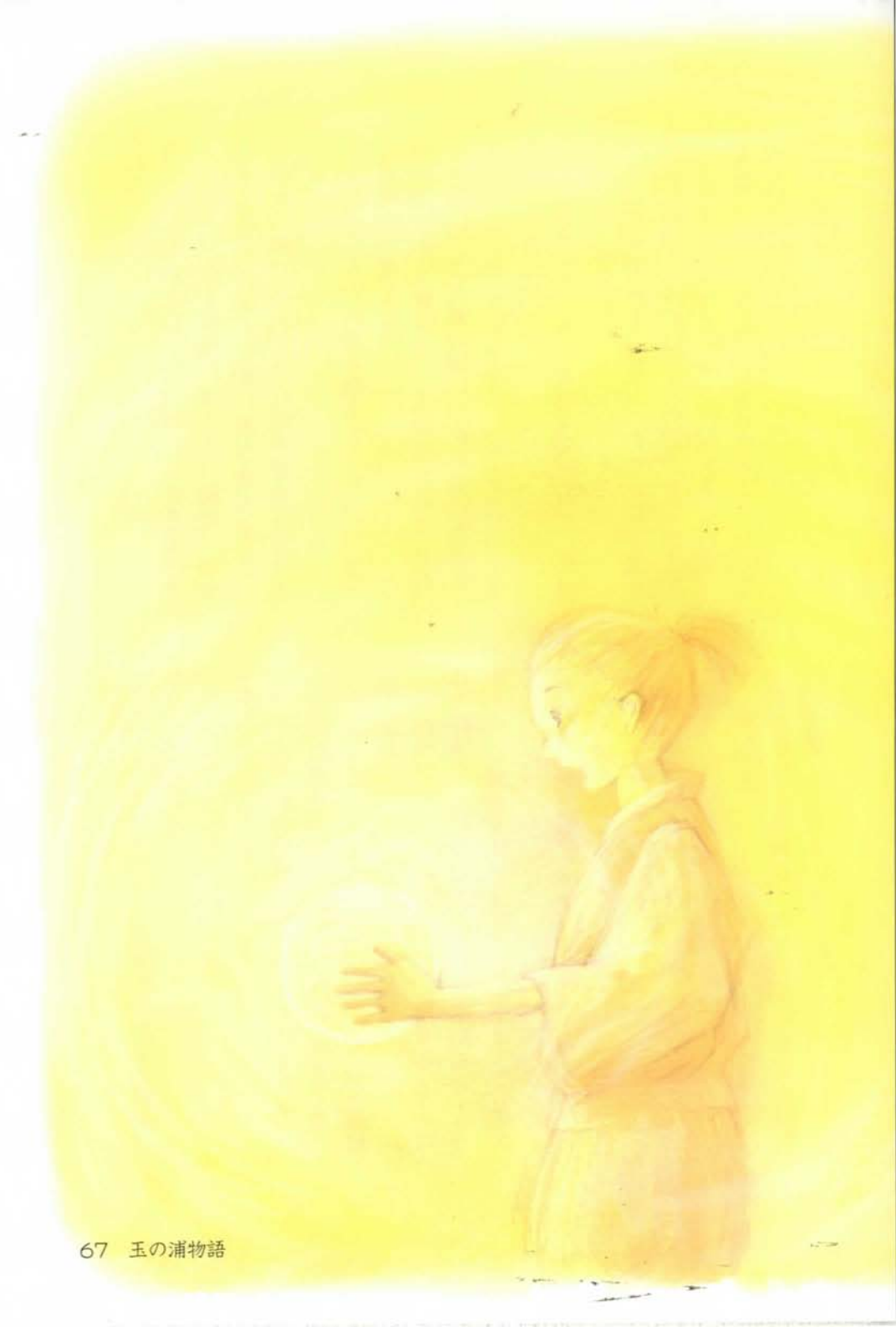
海に突き出た桟橋には、何隻かの小船が綱でくくりつけられていましたが、いつもあるはずの太助の船はありませんでした。

小太郎は桟橋の端に座り、波も無く静かな夜の海を、じっと見つめていました。その眼から一粒の涙が滲み出て、それから堰を切ったように次々と涙はこぼれて、海に落ちてゆきます。小太郎はしゃくりあげて泣きました。

そうして、どれだけ泣いたでしょうか。

突然、小太郎を呼ぶ声がしたのです。

『おい。おい、そこの童』
小太郎は、はっとしました。
『わしは寝とるんだ。そう毎晩毎晩うるさくされてはかなわん』
声は海の方から聞こえます。涙目をよく凝らして見ると、海面に何か白く丸いものが浮かんでいて、それが喋っているのでした。
それは小太郎が立つ桟橋へと、波間を縫うように近寄ってきました。すべすべと丸い綺麗な石で、表面がぼんやりと光っています。
『……ははあ。おまえは小太郎というんじゃな』
やがて、唐突に石が言いました。
『兄の太助が海から戻らんのか。じゃけえ泣いとる』
不思議な石の言葉に、小太郎は涙を拭きながら黙って小さくうなずきました。
『太助に会いたいのか』
石は言いました。
「会いたい」
小太郎は考える暇もなく、答えました。
すると、石が放つ光が、ぼう、と強くなったのです。蝋燭の明かりほどだった光は、今や、かまどの火のように明るく、どんどん光を増しています。
『じゃったら、ほれ。わしを持ち上げろ』
言われて、小太郎はかがんで、石を海から抱え上げました。光はどんどん強くなり、それはもう、目も開けていられないほどでした。
『もっと高う』
目をつむったまま、小太郎は空に向かって精一杯両手を伸ばしました。薄く目を開けると、見渡す限りが明るく照らされ、まるで小太郎自身がお日様になったかのようでした。
そして。海面を照らす白い光の中に、まっすぐ桟橋の方へと向かって来る、小さな船が見えたのです。



「あんちゃん！」
叫ぶと、船の上にいた人影が、手を上げて答えました。船が桟橋に着くより前に、小太郎は石を取り落とし、船に飛び乗りました。
太助が、飛び込んできた弟の身体を受け止めます。
「おうおう、こないに泣き腫らしてからに。まったく男前が台無しじゃ」
弟の頭に手を乗せて、太助は言いました。
小太郎は、まだ兄の腕にしがみついたまま、泣き叫びたいのをこらえて、じっと黙ってうつむいていました。
「あの雨の日からどうにも暗うて、なかなか帰れんかったんじゃ」
つかんだ兄の腕も、服も、じっとりと濡れていました。小太郎は、その顔を見上げることができずに、「うん」とだけ頷きました。
「小太郎、わしは死んでしもうた。もう釣りも教えてやれん」
「……うん」
「それでもこれからは、お前が、わしの代わりをせんといかん」
「……うん」
「よし、ええ子じゃ」
つかんだ着物の裾に、ぎゅうと力を込めて、小太郎は顔を上げました。太助は、明るく笑っていました。死んだはずなのに、その笑顔は何も変わってはいませんでした。
気がつけば、兄の姿は風景に溶けるように、徐々に消えかけていました。言葉が出なくて、小太郎は嫌々をするように、首を左右に振りました。
「大丈夫。大丈夫じゃ。小太郎はきっと誰にも負けん漁師になる。なんせ、わしの弟じゃけえの」
兄の着物の感触が無くなり、もう姿もほとんど見えません。
「……じゃあの。小太郎、おっかあを大事にな」
その言葉を最後に、太助の姿は霧のように霞んで消えてしまいました。小太郎は、それ

は大きな声で泣きました。
ようやく泣きやんだのは、しばらく経ってからのことでした。
『行ってしもうたか』
声のする方を見やると、船の横に石が浮かんでいました。先程の強い光はもうなくなって、波に揺れながら、ぼんやりと光っているだけでした。
『別れはすんだのか』
小太郎は黙って頷きます。
『なら、わしは寝る』
石はそう言うと、その表面に灯っていたぼんやりとした光も消えて、
『小太郎。もう、泣くな』
そして、とぷん、と海の中へと消えてゆきました。小太郎は少しの間、石が沈んでいった海の方をじっと見つめていましたが、何かに気付いたように顔を上げました。
見れば、空の端っこが段々と白んでおります。
新しい年の日の出。そのまぶしい朝日を浴びながら、
「……もう、泣かん」
と、十になった小太郎は小さく、つぶやいたのでした。